

千秀だより

横浜市立千秀小学校

10月号

平成26年(2014)10月 1日



『堂塔建立の際は、木を買わず、山を買え』

校長 市川幸男

先日まで校庭に鳴り響いていた蟬の声も、すっかり聞こえなくなり、秋の澄み切った空が高く感じられる季節になりました。本年度の前期が間もなく終わり、3日間の秋休みを挟んで10月14日から後期が始まります。学校では今、子どもたちに、この6カ月間の学校生活を振り返らせるとともに、新しい学期に向けたためあてを持たせようとしています。同時に学校がこれまで進めてきた本年度の取り組みについても、しっかり振り返り、これまで以上に子ども達を理解し、子ども達に寄り添い、子ども達の豊かな学校生活が提供できるようにして参りたいと存じます。保護者、地域の皆様には変わらぬご支援をよろしくお願いいたします。

さて、子ども達を丸ごと理解し、子ども達に寄り添うという、私はいつも、法隆寺最後の宮大工と言われる西岡常一さんの言葉を思い出します。ご存じの方もいるかと思いますが西岡常一頭領は、法隆寺の大改修や法輪寺の三重の塔の再建、薬師寺西塔の再建など、多くの歴史的遺産の改修・再建を担ってきた方です。その西岡家に代々伝わる口伝に『堂塔建立の際は、木を買わず、山を買え』という言葉があります。木はその育った環境から見ないといけないということです。木は、それぞれが生えていた山の土質によって材質が変わります。生えていた場所や環境によって、木の個性が生まれるんだということです。山の谷間に立ち、常に強い風にさらされていれば、それに耐えようとした密度の高い木になります。そんな木は、堂塔の芯柱や骨組みとなる所に使います。逆に陽当たりのよい南面に育った木は、真っ直ぐでのびのびと育っていることから、堂塔を飾る細工物などに向いています。そういった育った環境までも見て、木を使いなさいと言っているのだと思います。木は人間と同じで一本ずつが全部違います。それぞれの木の癖を見抜いて、それにあった使い方をしていくことで、千年の樹齢の檜から、千年以上持つ建造物ができるんだと言っています。



薬師寺西塔

本来、山は檜、檜葉、杉、落葉樹…、多様な木が生え、切磋琢磨して育っていくものです。それを現代では、管理しやすさからか一種類の木しか植えないようになってしまいました。そしてその中でも、真っ直ぐで枝の少ない木を良しとして、画一的に育てていこうとしています。建築材料としての用途が決まっている植林事業はそれでよいのかもしれませんが、でも子どもたちの育成という観点からは違っているのではないのでしょうか。子どもは一人ひとり違うものです。画一的で同じ教育を押しつけることは、子どものもっている本当の可能性を伸ばしているのか疑問です。一人ずつ性格や才能の違いをしっかりと捉え、その不揃いなところをそれぞれの子どもの良さと捉え、個性をうまく使い伸ばしていく、そんな教育を千秀小学校では実践していきたいと考えています。